The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	道なき道の開拓者 : 大野徹先生の思い出
Author(s)	南田, みどり
Citation	アジア太平洋論叢. 2001, 11, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

道なき道の開拓者－大野徹先生の思い出－

南　田　みどり

大野徹先生は我が国のビルマ研究の先達であり、その育ての親である。筆者のように先生から直接ビルマ語学習の手ほどきを受けた幸運な者だけではない。全国のビルマ研究者ことごとく、先生から直接であれ間接的であれ、何らかの形で教えを受けている。

我が国初のビルマ語教育機関大阪外事専門学校ビルマ科の設置は、1945年４月であった。1949年に大阪外国語大学ビルマ語学科に昇格した後も、隔年で卒業生が送り出された。1935年長崎県生まれの先生は、1960年８回目の卒業生にあたられる。先生はすでに学生時代、海外渡航の困難な時期に、財界から寄付を仰ぎ、同期生３名と貨物船に便乗してビルマの土を踏むという開拓者精神の持ち主であった。

1961年専攻科を修了されると、先生は京都大学大学院文学研究科修士課程（言語学専攻）に進まれ、さらに引き続き博士課程に進まれた。我が国初のビルマ語教育機関が生んだ我が国初の本格的なビルマ研究者の道は、こうして始まる。1965年先生は大阪外国語大学助手として採用され、翌1966年講師に昇任された。そして1967年から1969年までコロンボ計画専門家として、ラングーン外国語学院で日本語教育を担当された。

1966年にビルマ語学科に入学していた筆者は、ビルマ語日本語辞書がないうえ、ビルマ語英語辞書も入手困難で、客員教授も不在という劣悪な教育環境の中で、意気消沈することしばしであった。さらに1962年のクーデターでビルマは鎖国状態であり、留学はおろか旅行もままならなかった。ビルマに関する情報は極端に制限されていた。そんな中で先生の存在は、学生たちに光を投げかけていた。先生がビルマ語科誌「いらわじ」に寄稿された現地情報に、我々は胸躍らせたものである。こ

の時期に先生から現地のペンフレンドを紹介された。今は亡き若手詩人である。彼の励ましで筆者の学習意欲がかき立てられ、彼の人脈が筆者の文学研究に貢献していることを思えば、先生に改めて感謝したい気持ちで一杯になる。

紛争収拾後再開された大学で、帰国早々の先生の講義を受けた。政治経済だったと記憶するが、新鮮で刺激的であった。先生は1970年外国語学部助教授に、1976年教授に昇任された。先生のご関心は広範囲に及んだが、いずれの分野でも学問としての地域研究のひとつの範を示された。その著作は膨大で、語学入門書から文学作品の翻訳まで、政治経済、歴史文化、宗教まで多岐にわたる。なかでも1960年代後半から70年代初頭にかけて、英語ビルマ語文献を駆使して著された大部の論文「ビルマにおけるカレン民族独立闘争史」(1971年アジア経済研究所「発展途上国の経済発展に関する諸問題」優秀論文賞受賞)「ビルマ国軍史」(1970)は、ビルマ現代政治研究者の必読文献となった。

70年代から80年代にかけては、碑文、村落財源調書、漢籍史料、遺跡発掘資料も縦横無尽に駆使され、パガン時代からコンバウン時代に至る王朝時代の社会経済構造や人々の精神生活を解明された。さらには壁画や仏塔などビルマ仏教美術研究でも先鞭をつけられた。その業績は、90年代には古典文学研究にも及んだ。翻訳『ビルマ文学史』(1992発行)で先生は、原著をしのぐほどの入念な解説を提供してくださった。しかしその探求心はもはやビルマの枠に止まらなくなった。現在は、英語のみならずフランス語ドイツ語パーリ語文献ならびに、各国語版に当たり、東南アジアから雲南、インドにおける『ラーマーヤナ』比較研究を展開され、国際学会の注目を集めている。

先生は1992年から2年間大阪外国語大学学生部長の要職を務められ、大学運営にも携わられた。先生はまた毎年一年生を対象にビルマ語入門授業を担当され、テキストや辞書を編まれ、我が国のビルマ語教育のけん引者でもあった。ふだん温厚な先生が学生達を震え上がらせるのは、年に一度の卒業論文試問時であった。先生は論文を丹念に読まれ、詳細なメモをもとに学生達の論旨の展開の矛盾や、事実認識のあいまいさや、資料の見落としを指摘されるのである。先生の学問研究に対する厳しさを学生たちが垣間みるのは、わずかにそのような時であった。

筆者は大学卒業の4年後、大学院修士課程で再び先生の教えを受けた。一対一の

ぜいたくな授業で、先生は現代文学史から小説、碑文まで一緒に読んでくださった。先生はお忘れかもしれないが、授業の前によくお茶をいれてくださったのを覚えている。1978年からは、同僚として先生のお手をわずらわせた。30年になんなんとするおつきあいの中で、先生の学問研究への厳粛な姿勢やその著作から多くを学ばせていただいた。先生との話題に、私事というものはほとんどのぼらなかった。他の学界にありがちだと側聞する村社会的人間関係に、先生は全く関心をお持ちにならなかった。そのあくなき知的好奇心、探求心、比類なき集中力は、もっぱらビルマ研究に向けられていた。

いまビルマ小説翻訳の追い込みに呻吟している筆者の手元に、心強い味方がいる。大野徹先生が長い年月をかけて編纂された我が国最大のビルマ語辞典である。できたばかりの辞典を先生からいただいた。先生が故原田正春先生と共著で初のビルマ語辞典を刊行されたのは、1979年であった。当時としては画期的な労作であるとは言え、翻訳者にとって収録語数は満足できるものではなかった。同じ頃ビルマで発行された初の国語辞典も未入手であり、頭を抱えていた筆者に先生は、聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥だから遠慮なく聞くようにとおっしゃり、丁寧に教えてくださった。思えば先生は、筆者の辞典的存在でもあった。先生の著作の多くを、筆者はいまもしばしば参照させていただいている。生き字引である大野徹先生が大学を去られた後も、引き続き先生の著作の数々に教えを乞いながら、微力ながら学生の指導にあたっていきたい。

寸暇を惜しんでご研究に没頭しておられた先生は、これからも意気軒昂に道なき道を邁進して行かれるのであろう。長年のご指導に心から感謝しつつ、ご健康とご多幸をお祈りしたい。

2001年３月３日